ハンザキ青森縣に產す

和田干藏

大正十一年八月二十五日に青森縣東津輕郡高田村大字高田字圓野を流るる荒川用水堰（高田村大字野澤南方約十町の地點より分岐する荒川の支流にして俗に後川（ウシロガハ）と謂ふ）より、同村奥崎平八氏が四足ある大怪魚を捕り飼育中とのこと地方新聞紙上に表はれたるを以て、多分ハンザキなるべしと早速入手運動を開始せしが、採集者奥崎氏の御好意により吾青森縣師範學校の標本とすることを得るに至れり。

入手と同時に生體を調査せしが正しくハンザキ *Cryptobranchus japonicus* にして體長一尺七寸頭部の幅二寸五分（重量は測定し損ひ殘念なり）眼は極めて小さく、耳に鼓膜を缺き、口の裂け目頗る廣く顎には鋭利なる細齒を列生し、開口すれば口內恰も櫻色を呈す。皮膚は極めて粘液に富み、之を摑むとするも容易に摑むこと能はず、皮膚の斑紋は背腹兩面共に略一樣なりと謂ひ得れども腹部は少しく地色淡く且斑紋粗大なるの感あり。頭部には大小無數の疣狀突起を有し、之を突き破り汁液を出して嗅げば一種異樣の臭氣を覺え時に噴嚏（クシヤミ）を數回連起せしことあり、四肢は短く前肢は四指後肢は五指にして指端には *Onychodactylus* の如き黑爪を有することなく且後肢の左側は負傷し居れり。

捕獲後九月五日迄十二日間飼育し諸種の習性を觀察したれども、何等之はと云ふべき奇習も發見し得ざりき。只光線を非常に忌み小許たりとも暗所に趨行し强き光線に對しては吾人が故意に加ふる壓迫と共に著しく憤怒を表情し、此の際一生徒水族器に接近するや頻りに呼吸し荒々しき態度を示したるを以て、長柄のピンセットを口に入れしが之に嚙み付き頭を動かさず後體部のみを旺に振廻して之を嚙み切らむとせり、又呼吸する息音は一種奇にして二三分間間每に一回宛行はれ水上に頭部を少しく上げ水泡と共に呼吸するが故に一寸薄氣味惡しきものなり。之を陸上に放つ時は相當の速力にて進行し、油斷

するときはそのまゝ逃げ去る事もなしとせず、歩行は牛馬と等しく先づ左前肢より始め次に右後肢を出し、次に右前を出し後に左後肢を運ぶの順序にて進行す。かくする間身體漸く衰へ九月六日の朝遂に死に果てたるを以て浸漬標本として保藏し置けり。捕獲後は種々なる食物サワガニ、フナ、アユ等の小型の物を給與するも一掬だに喰せざりき、因に同物棲息せし流域にはアユの類似物栖息すること多しと聞く。

由來青森縣にてはハンザキの棲息することは別に不思議にもあらず又珍らしきことにもあらずして、古來各地にて捕獲せられたるを耳にする所なり。近きは三四年前に北津輕郡十三湖附近に又上北郡奥入瀬川(オイラセガワ)及其の附近の各地より四足無鱗の怪魚として產せしとの報ありしが、其の眞狀を確めんとして出張すれば皆料理して喰ひ盡し居ち、標本として何等を學界に物語るものとて殘し置かざるを以て遺憾として居る所なりしが、今年は何たる因緣か前記の所に於て前記の實物を獲たるを以て始めて其の眞相を慥め得るに至れり。其後本校參觀人の一小學校教員が前記の標本を觀て之がハンザキか之なら今年の八月中に岩手縣福岡町附近にても捕り、動物名不明なりしため單に例の怪物として食したりとの言葉を聞くや、予は又而らば福岡町附近にて捕られたるは今年を以て始めなりしかと問ひしが、否時々捕られたるが如しと答へたり。

茲に於て予はハンザキなる動物が青森縣竝に東北地方にも產することは確實にして、從來の中國附近局限分布說を改訂し、北方は北緯四十一度の青森縣迄分布するものなることを主唱せんとす。

尙青森縣に產するハンザキが中國地方のものと別種なりとせば又一考する所多きが故に明年度に於て更に前記の箇所は勿論他の箇所を探檢して實物の採集を決行せんとす、終りに標本寄贈者(採集者)奥崎平八氏の御厚意を感謝す。(完)